キャラクター名
縫無 莫接綴 (Homu Nahato)

プレイヤー名

シンドローム	ウロボロス ノイマン	ワークス	エグゼクティブ	カヴァー	大学生
オプショナル		年齢	20	性別	♂
覚醒	無知	衝動	飢餓	初期侵食率	39 %
出自	親の理解	経験	小さな名誉	邂逅	ビジネス

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	0	0			1
感覚	1	0	0			1
精神	5	0	0			5
社会	1	1	0			2

HP	27
行動値	7
(非装備時)	7
戦闘移動	12
全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ			交渉		
回避			知覚			意志	1		調達	7	
運転： 匣	2		芸術：			知識 :ﾚﾈｹﾞｲﾄﾞ	1		情報 :ウェブ	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
ヘヴィマシンガン		-3		12		搭載火器
レーザーランチャー		0		8		装甲無視,搭載火器
大口径機関砲		0		21		G不可,対トループdm+2d,搭載火器
車載機関銃		0		9		対トループdm+2d,搭載火器

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
常備化pt加算	
要人への貸しw/ストーン	
情報収集チームw/サヴィ	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
亜純血	P	N		
神城早月	P 信頼	N 憐憫		
両親	P 懐旧	N 疎外感		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 18	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
神速舞踏	5	2-1	aut					
効果：								
青:神殺す刃	4	4+1	min					
効果： A:装甲兵器,運転:匣,デモンズシード								
虹:黒の剣舞	1	4+2	maj					
効果：								
ブラックマーケット	3		pas					
効果： 常備化pt+Lv*10=30,侵基+2								
└裏資産,故売品	1		item					
効果： 常備化pt+10+15								
紫:異形の転身	1	6	ini					
効果： 侵基+4								
アフターライフ:ゼノスネットワーク	1		item					
効果：								
└亡霊の御印,SMAW,Rバランサー	4		item					
効果：								
黄:先陣の火	2	2	set					
効果： 侵基+3								
影送り	★	1						
効果： 連続した影の範囲内で転移								
ｲｰｼﾞｰﾌｪｲｶｰ:ﾎﾟｹｯﾄﾃﾞｨﾒﾝｼｮﾝ	★							
効果： 侵基+1								
効果：								
効果：								

【データ】
射撃攻撃するだけ。シナリオ1回くらい「対象:範囲」(選択ではない)可能。

【能力】
匣(アーキタイプ:装甲兵器)に仕舞っていた兵器や火力そのものを取り出し、それらによる単独での十字砲火を行う。

【概略】
彼女に教えられた物事、彼女が喜んでくれた品々。その原初体験をもって彼は蒐集家となった。
生来の超人的な思考速度といつの間にか持っていた"匣"の能力でズルをしながら、彼は学生の身分にして、小規模ながら世界と取引をする企業を立ち上げた。扱う商品は様々だが、共通して最先端技術の結晶という特徴がある。勿論その中にはレネゲイドに関わる品々も含まれる。
何もかもを手にすれば、あらゆる幸福を産み出すことができる。そんな考えが生まれたあの日々の思い出を過去に置いてきたまま―――

【少し細かい内面】
産まれた時から少しだけ人より思考が速く、幼さゆえの万能感と虚無感をずっと覚えていた。ずっと何か物足りない、そんな飢えを抱えていた中で出会った少女と、彼女から齎された喜びで初めて満足感を得た。それからはずっとその成功体験を追い続けていた。持ち前の思考力と、いつの間にかあった"匣"。それらを駆使し、遂には学生の身分で起業して、そうやってあの時の喜びをずっと追い続けた。
両親は、放任主義なのか諦めなのか、それとも"全て"を察していたのか、止めることも口を出すこともなかった。そんな家族が消えた時に去来した虚無感はなんなのか。曲がりなりにもあった家族愛か、血の繋がりさえも我がものと主張する強欲か。なんにせよ放置する気はない。